

---

# GEON

池袋秋葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GEON

### 【Nコード】

N9952C

### 【作者名】

池袋秋葉

### 【あらすじ】

秋田を守るローカルヒーロー“超神ネイガー”を題材としたファンフィクションです。別名義で知人のサイトでも公開中。キャラクター等の詳細は《超神ネイガー・公式ホームページ》<http://homepage1.nifty.com/nexus/neiger/>でご確認下さい。なお、一部オリジナル設定を用いています。

風の匂いが変わった。フジサト・シローは軽く眉を潜める。

ほんの数刻前まで、そこには山特有の清涼たる空気が満ち溢れていた。けれど今、辺りに漂うのは禍々しさに満ちた臭気。そして同時に感じる、大地の泣き声。

悲鳴を上げているのは、今彼が立っている場所そのものではない。だが、秋田の自然を愛する彼には、それが何処から発せられるものであるうと感じられる。聞こえる。

原因など、確かめるまでもないことだ。今まで幾度となく触れてきた、この邪気を間違える筈がない。

「……つだぐ、難儀なヤツらだごどや」

吐き捨てる様に呟いたシローは、ベルトのバックルに触れながら、静かに目を閉じた。そのまま丹田に気を集めれば、体の更に深い部分で、ふつふつと力が湧き上がるのを感じる。その高まりが頂点に達しようとする瞬間、シローの喉は自然とその言葉を吐き出していた。

「GO-SHAKU！」

バックルに埋め込まれた“石”が、急速に熱を帯びた。全身の毛が逆立ち、まぶたの裏では一瞬白い光が弾ける。そして、次に目を開いたとき 彼はネイガー・ジオンに姿を変えていた。

ナモミハギの力を借りた正義の戦士は、光をも凌駕する速さで駆け出した。

「いい加減、ユーの顔は見飽きたよ」

ゴンボホリーは大仰な仕草で肩をすくめると、溜息と共に言葉を吐いた。

「その台詞、そっくりそのまま返してげる」

油断なく身構えたままでジオンは、合いも変わらず派手な衣装に身を包んだ相手へと、鋭い視線を投げ返す。

辿り着いた山の中では、今正にホジーネたちがホリーの指示を受けて、マツクイムシの幼生を撒き散らしている最中であつた。けれど数人程度の戦闘員など、到底ジオンの敵ではない。数度拳を振るわせれば、尻尾を巻いて逃げ出してしまった。

だが、さすがに行動班長を名乗るだけあつて、ホリーはその場から動かなかつた。腰に刺したロッドに軽く手をかけ、けれど今は抜かず、一定の距離を保ったままでジオンを見詰めている。

「しつかし…… おめがだも、てんげ懲りねなあ」

呆れと感嘆の入り混じる声を漏らせば、ホリーは軽く鼻を鳴らす。「ユーたちが邪魔さえしないでくれれば、僕だって何とかの一つ覚えみたいに、同じことを繰り返さずに済むんだけどね？」

「それだば、出来ねえ相談だ」

「そう言うだろうとは、思つたさ」

薄く笑つたホリーは、指を鳴らした。それに呼応して、対峙する二人の間で、地中から黒い影が湧き上がった。長い両腕を振り上げるその姿を見て、ジオンは軽く肩をすくめる。

「まーだ、そいづがや。なしでそんだに覚え悪いな。そいだば何度も、オレさ負けでらねが」

「ふん。こつちだつてちゃんと改良を重ねているさ」

けれどホリーは、ジオンの悪態を気にした風もない。

「何より 素材には事欠かないからねエ。産廃つてヤツは、増えこそすれ、減る気配なんて微塵もないじゃん？」

薄笑いを浮かべたまま、ホリーは数歩後ずさり　そして小さく叫んだ。

「さあ、もう、お喋りは十分だろ　やっちゃいな、ホイドタガレ　っ！」

その声に応じ、再び腕を振り上げたホイドタガレは、ゆっくりジオンとの間合いを詰めてきた。ジオンは一歩後ろに下がると、両腕

を脇に構えて小さく叫ぶ。

「……キリトンファー！」

空気を軽く震わせ、ジオンの手の中に武器が装着された。ジオンはそれを構え直すと、軽やかなフットワークで相手に向かって行く。ホイドタガレの長い腕が宙を風ぐ。ジオンはそれを軽々と交わし、胸元へと間合いを詰める。叩き込む一撃は、敵の腹部に命中した。

けれどさすがに、それだけで揺らぐ相手ではない。大したダメージを受けた様子もなく、ホイドタガレは次の攻撃を繰り出してくる。再び振り上げた腕の先に掠められると、痺れるような痛みが走った。なるほど、改良してらったのは、バシでもねえみでっだな。

間合いを取り直しつつ胸の中で呟き、ジオンは唇の端を笑みの形に刻む。

確かに相手は、戦う度に手応えが出ている。正義の味方としては喜ばしい話ではないのだが、相手が強ければ強い程燃えてしまうと、この格闘家としての本能が、それを喜ぶのは否めない。

叩き付ける腕を、己の腕で受け止め、次いで拳を繰り出せば、固い皮膚がそれを弾く。互いに小さなヒットを与え合ってはいるものの、共に大したダメージにはなっていないかった。

そんな風に幾度か攻守を入れ替えた後、振り回される腕の間隙を縫って、再度ジオンは相手の懐へと飛び込んだ。下方から振り上げた武器は、敵の喉元とおぼしき箇所を打った。基本的に急所である部分を攻撃され、一瞬ホイドタガレの動きが止まる。その機を逃さず、ジオンは全身を反転させて弾みをつけ、その横腹を力強く回し蹴った。

「~~~~~！！」

怪人が奇声を発した。表情がないだけに判り難いが、これはかなりのダメージであつたらしい。今や完全に攻撃の手を止めたホイドタガレは、その全身を小刻みに振るわせながら、その場に立っているのがやっとの様を見せている。

チャンスだ。

ジオンは武器を、瞬時に異空間へと仕舞い込む。そして己の拳に向けて、全身の闘気を集中させた。エネルギーの生み出す、薄青い炎に似た揺らめきが、その両手から立ち昇る。

「いぐど……っ」

低い、けれど明瞭な響きの声で呟くと、ジオンは相手に正から向かって構える。そして。

「クマゲラ　パンチ！」

光の速度　いや、それ以上の速さで繰り出される無数の突きが、ホイドタガレの胸元に叩き込まれた。怪人は防御できぬまま、その拳を受け続ける。叩き込まれるパンチの反動で、その体はがくがく揺れていた。

やがての後に、全霊を込めた最後の一撃が激しく打ち付けられる。しばらくの間ホイドタガレは、その場に立ち尽くしていたが

やがて、どう、と鈍い地鳴りを立てて仰臥した。もはや完全に、その動きは停止していた。

ジオンは微動だにしない怪人の姿をしばし見つめた後、くるりとホリーへと体を向ける。

「さあ　後はおめだけだぞ、ゴンボホリー」

彼らの戦闘中、支援するでもなく僅かに離れていた位置から黙って成り行きを見詰めていた行動班長は、面白くもなさそうに細い溜息を吐いた。

「……期待してたより、持たなかったね」

ジオンは再び虚空から武器を呼び出し、その両腕に装着させて、攻撃のための構えをとった。けれどホリーは、更に一步後ずさり、ジオンとの距離を引き離す。

「逃げらながつ?!」

開けられた空間を埋めようと、ジオンが前へ足を動かせば、ホリーは一步又一步と後退していく。急激に引かないその動きは、ジオンを挑発するかのようだ。

「ここまで来て、戦わねえつもりなんだがつ」

「ふん。僕は何処かの野蛮なオジサンとは違って、白兵戦は好みじゃないんだよ」

喉の奥でくつくつ笑いながら、ホリーは言った。

「ま 今回の戦闘データも、ちゃんと回収できたようだし。今日はこの辺で退いてあげるさ」

その視線が向くのは、ジオンの後方。釣られてそちらを振り向けば、何処から沸いて出たものか、ホジーネたちがホイドタガレの体を抱え上げながら走っていく様が見える。

「ローズ・ストーム！」

その光景に、すっかり気を取られていたジオンの耳に、聞き慣れぬ響きの言葉が届いた。ハツとして再び振り返ると、空間から生み出された無数の薔薇がホリーの全身を包んでいくのが見えた。

「……待てや……っ！」

駆けだそうとしたジオンに向かい、薔薇の花びらが吹き付けられる。驚くべきことに、それは鋼の固さと刃の鋭さを持っていた。ジオンは慌ててトンファーを振るい、それらを叩き落とす。

「今度会った時が、ユーの最期だと思っておきなよ。それじゃ

See You！」

笑うホリーの声が遠ざかって行くが、視界を覆う程の花びらの嵐に遮られ、追うことは叶わない。やがて、彼が完全に自由の身となった頃には、既にそこには誰の姿もなかった。

「……だじゃく組合めっ。次から次へと、卑怯な手ばかり使いやがってっ」

低く唸ったジオンは、先刻叩き落とした人工の薔薇を踏みつける。地面に落ちてしまったそれは、何故か既にただの造花と化しており、手応えもなくにじられた。

ジオンは膝をついて、その一片を拾い上げる。朽ちることのない人工の花。確かに永遠の美しさを持つかもしれぬ、けれど不自然な存在に埋め尽くされた大地は、まるで何かの墓標に見えた。

一瞬、ホリーの言葉が頭を過る。あの男は言った。産業廃棄物は

増えこそすれ、減りはしない、と。それは悲しいが事実かもしれ  
ない。

けれど。

「それでもオレは……だからこそ、オレは！ 秋田を！ 自然を守  
る！」

自らの胸に湧く不穏な想いを振り払おうと、頭を振りながら立ち  
上がったジオンは、空を見上げて叫ぶ。自らの心に誓うように。

ようやく静けさと清らかさを取り戻した山の中、その声は微かに  
木霊を繰り返して行った。

《終》



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9952c/>

---

GEON

2010年10月8日14時40分発行